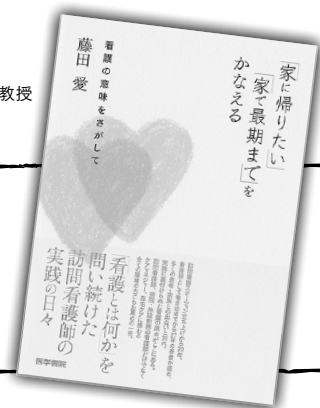




Book Review

評者: 山田雅子 聖路加国際大学大学院看護学研究科教授



「家に帰りたい」「家で最期まで」をかなえる 看護の意味をさがして

著: 藤田愛 / 本体: 2,300円+税 /

発行: 医学書院 / TEL: 03-3817-5657

本当の看護とは何かを知りたい人に読んでほしい

魂の看護に出会えました。でも、看護師の物語ではありません。看護するとは看護師だけの仕事ではなく、普通の人が普通の生活のなかで、大事な人を思いやり行動することすべてが看護することなんだなあと感じました。書き手である看護師の藤田愛さんも、たくさん看護されている姿が手に取るようにわかります。

「看護師のコミュニケーション力が落ちていく」と言われて久しいです。患者経験をした人は、「看護師は一步踏み込む対話ができない」と言いますが、藤田さんの対話力は凄まじく素晴らしい。うまい具合に踏み込んで、気持ちよいほどに患者や家族、ときには医師の心をつかみます。それは耳でキャッチして頭で理解するのでは到底なく、全身で感じるのでしょうか。推察とも違って、たとえば言葉による表現がなくても、看護師藤田さんの五感から得られた情報からのアセスメントに第六感が加わって確信につながるのです。全身全霊をもって看護するとは、こういうことだということが表現されています。「何かあったら呼んでください」と形式化されたセリフしか言わない看護師とはまったく違うことが、誰が見てもわかります。

質の高い看護とは何でしょう。安全に治療を受けてもらうことですか。転ばせないように行動制限することですか。褥瘡を創らないことですか。意思決定

が必要な選択肢を投げかけることですか。この「愛の物語」を読めば、これらは看護師の仕事の基本的「き」の字にしかならない、あるいは患者や家族の本当の想いにふれば、これらの看護行為は質の高い看護どころではなく、余計なおせっかい看護になっている可能性に気づくかもしれません。

在宅での死亡診断はしないという主治医、認知症高齢者が自然に人生を終えることを許さない専門職たち、わかるように病状を説明しない医師、家族で決めてくださいと意思決定支援を放棄する看護師、こうしたたくさんのハードルを乗り越えなければ、生きたいように生きられない、今の現実をあなたはどうか受け止めますかという問いを、藤田さんはこの本とおしてすべての人に投げかけています。

「あなたがいてよかった」と藤田さんの看護にふれた人々は口にします。それは、一緒になってハードルを越える努力を惜しまなかったからです。失敗もありましたが、それが看護することとされることにつながります。

主語が誰なのかしばしばわからなくなる文章ですが、これでよいのです。テンポよく伝わりました。科学論文とは違い、看護のそして人間の本質を扱っているとても貴重な本だと思います。愛にあふれた物語です。電車で読むと涙があふれて困りました。